

Intervention Process by Experienced Nurses for the Improvement of Self-Efficacy in Patients Suffering from Depression

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 榮子, Sasaki, Eiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/19485

平成 19 年 2 月 20 日

博士論文審査結果報告書

学位授与番号 医博甲第 1856 号

学籍番号

氏 名 佐々木 栄子

論文審査員

主 査 (教授) 稲垣 美智子

副 査 (教授) 小山 善子

副 査 教授 島田 啓子



論文題名 Intervention Process by Experienced Nurses for the Improvement of Self-Efficacy in Patients Suffering from Depression

論文審査結果

論文内容の要旨

本研究は、「熟練看護師によるうつ状態にある患者への看護介入のプロセス」を明らかにすることを目的に、精神科に7年以上勤務する18名の看護師に半構成面接によるデータをもとに修正版グラウンデッドセオリーアプローチによる分析方法を用いて行った。さらにその病院でうつ状態と診断された患者8名に、入院時から退院に至るまでに計4回と退院後に1回、一般性自己効力感尺度と不安・鬱尺度を用いて、看護師の介入プロセスの支持を検討した。その結果以下のことが明らかとなった。1、熟練看護師によるうつ状態にある患者への看護介入のプロセス：18の概念と7カテゴリーが生成され、第1段階から第3段階に向かう3つのコアカテゴリーと収斂されるプロセスが見出された。そのプロセスは第1段階として「力の消耗源を探す」、第2段階「力の芽生えを確認する」、第3段階「力をつけ退院の道筋を考える」であった。これらの段階は不安軽減を軸足とした看護介入であると意味づけられた。またこの段階を看護師として踏めるためには「自分を支える職場環境」「主治医との連携」「ケアにはまるフローな体験」が関係することも明らかになった。2、看護師の介入プロセスの支持：自己効力感と不安は入院時から退院にむけて強い逆相関を示し、不安軽減を軸足とした看護介入プロセスの有効性が支持されるという結果を得た。

審査結果の要旨

本研究は、うつ状態の患者には励まさないケアが一般化されているが、熟練看護師は患者の状態を見極め介入内容の判断とそれにもとづいた介入を行っているのという仮説にもとづいた研究であり、結果はこれまで示されなかった看護師の判断内容とうつ状態患者への積極的な看護介入のプロセスをその構造と共に明らかにした極めて意義が大きいと評価した。この結果は、うつ病患者に限らず、今後のうつ状態にある患者へ看護介入に新しい知見をもたらした。さらに介入の支持を確認し有効性を裏付ける方法を用いたことは結果をより信頼性の高いものにしていく。よって本論文は看護学の発展に寄与するものであり、博士論文としてふさわしく博士後期課程の学位授与に値すると判定する。